若越郷土研究
35の1

二人の留学生とグリフィス（一）

杉原丈夫

まえがき

二人の留学生というのは日下部太郎と今立吐酔である。日下部は福井藩からアメリカのラトガーズ学園に留学し、グリフィスは逆に福井藩に招かれてラトガーズ学園から明新館へ教師として来任した。今立は明新館におけるグリフィスの愛弟子であり、彼にすすめられてアメリカへ留学した。

本稿の目的は、性格の異なるこの二人の留学生が、それぞれたどった運命と、その留学の意義、および彼らとグリフィスとのかかわりについて述べることにある。

改革教会とラトガーズ学園

日下部太郎およびグリフィスについて書かれた日本語の著作または記事はいくつかあるが、たいていは彼らの個人的伝記に重点が置かれていて、彼らの精神的よりどころとなっていた改革教会やラトガーズ学園の性格について記しているものは少ない。

したがって、日下部がなぜラトガーズ学園を留学先に選んだか、またなぜラトガーズ学園がグリフィスを推薦して福井へ送ったのか、それらの事情は一般にはあまり知られていない。

さらにいえば、ラトガーズ学園に留学した学生は、日下部ひとりではない。彼を含む何人もの日本人留学生が、かの地でどのような生活をし、どのように学問をし、そしてどのような生涯を送ったであろうか。これも詳しくは知られていない。

周知のように、キリスト教にはカトリックとプロテスタントがある。そのプロテスタントには、スイスのカルビンを宗祖とする宗派と、ドイツのルーターを宗祖とする宗派とがある。

カルビン派はさらにいくつかの宗派に分かれているが、そのうちの有力な一派にオランダ改革教会がある。この教会は十六世紀にオランダで結成され、その後いくつかの国に広まったが、特に多くの信者がいたのはアメリカとフランスである。日本と深い関係を有していたのは、このアメリカのオランダ改革教会である。(以下簡略のため単に改革教会ということにする)

アメリカの改革教会は十九世紀においてアジア諸国への海外布教に力を入れ、インド・アラビア・中国そして日本へ伝道師を派遣していた。

そのうち日本へ派遣されていたのが有名なギドウ・ファーベック（Guido Verbeck,1830—1898）である。日本人は彼のことをフルベキと称していたので、本稿でもフルベキと呼ぶことにする。

彼は一八五九年（安政六年）来日、長崎で英学を教えていた。志ある青年が日本の各地

から彼のもとに集まり、英学を学んだ。英学というのは蘭学に対することばであって、単に英語を習うことではなく、英語の書物を通じて西洋のさまざまな学問を修めたのである。

わが福井藩からも最初は瓜生保、次いで日下部太郎が、英学修行のためにフルベキのもとに派遣された。

当時の日下部はおそらく、フルベキが改革教会の伝道師であることを知らず、まして改革教会がキリスト教の諸宗派の中でどのような歴史と教義を有しているかについての予備知識を持たずに入門したのであろう。しかし日下部とラトガース学園を結ぶ目に見えない糸が、すでにこのとき張られたのである。

ラトガーズ大学の正式の名称は現在は「ラトガース、州立大学」であるが、これは一九五六年からの名称であって、それまでに数回校名を改称している。

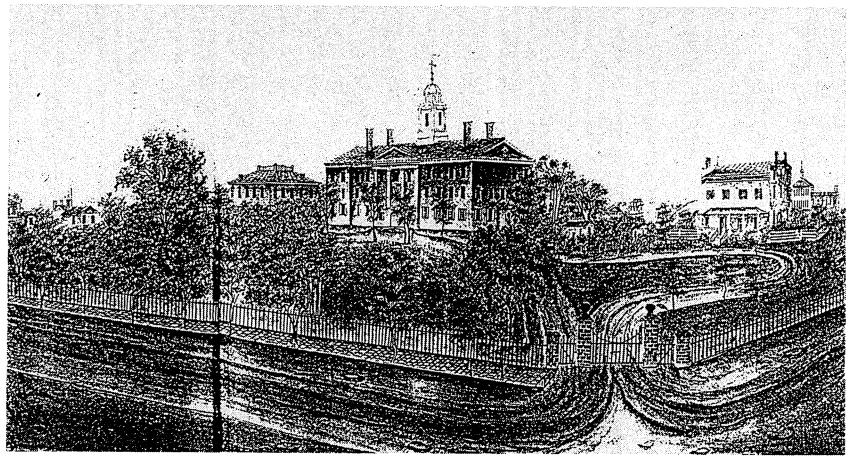
一番最初の名は「クインズ・カレジ」である。この学校は一七六六年オランダ改革教会の人たちによって創立された。一七六六年といえば、アメリカ合衆国の独立以前のことで、アメリカでは八番目に古い大学である。

ところがこのカレジは、十九世紀の初め経営難におち入り、一時廃校になったが、ヘンリ・ラトガーズという人の援助により一八二五年に再興して、「ラトガーズ・カレジ」という校名に変わった。グリフィスや日下部が入学した一八六五年ごろは、このラトガーズ・カレジ時代であった。

ラトガーズ・カレジの規模は、一八六四年には八一人の学生と一二人の教授がおり、その建物や敷地の状況は一八五九年ごろに描かれた図では第1図のとおりである。中央の建物がクインズ・カレジ以来の本館である。学生数八一人というのは、現在の目からみれば、ずいぶん小さい学園であるが、当時としてはカレジ側が誇りとした数であった。

ラトガーズ・カレジで教えていた学科は、キリスト教関係のものと、ラテン・ギリシア関係の古典的なものであって、今日風にいえば神学科と文学科とを併せたものであった。

ラトガーズ学園にはカレジのほか「ラトガーズ・グラマ・スクール」という学校があった。これはカレジより一段下で、中学校レベルの学校であった。外国の留学生で英語がよ



第　1　図

く話せない生徒は、まずこのグラマ・スクールに入学して語学の勉強をした。

以上述べたことで明らかなように、ラトガーズ・カレジは、改革教会系統の、宗教色濃厚な学校であって、当時日本にあった各藩の藩校とは本質的に異なったものである。ところが日本人留学生は、少なくとも入学当初は、このことに気づかず、理解不足の状態のまま在学していた。

具体的な例を一つあげておく。熊本藩の横井小楠に二人のおいがあった。この二人はフルベキの紹介状を持って一八六六年（日下部の留学の一年前）にアメリカへ密入国をし、ニューヨークにある改革協会の海外伝道部事務局へ連れて来られた。

そこの責任者フェリス（Rev. Dr. Ferris）がこの二人に面接して、留学の目的を尋ねたところ、彼らは「大砲や軍艦を造る技術を学びに来た」と答えた。つまりこの青年たちは、ラトガーズ・カレジがどのような学校か、また改革教会の海外伝道の目的がどこにあるかを全然知らずに、訪ねて来たのであろう。

日下部太郎の略歴

日下部太郎の本名は八木八十八（やそはち）という。アメリカ留学にあたり改姓改名した。当時の留学生には姓名を改める者が少なくなかった。彼は一八四五年（弘化二年七月）に福井で生まれている。彼の父は百五十石どりの福井藩士であった。

福井藩の藩校明道館には、蘭学科はあったが、英学科はなかった。しかし幕末になり、オランダ語よりも英語が重要になってきたので、福井藩でも長崎のフルベキのもとへ英学修業の学生を送った。八木八十八は、瓜生保に次いで二番目に派遣された学生であって、一八六五年（慶応元年九月）彼が二十歳のときのことである。

当時幕府は海外渡航を禁じていたが、一八六六年（慶応二年五月）その禁を解いた。そこで福井藩は藩の最初の海外留学生として八十八を選んだ。

翌一八六七年（慶応三年二月）彼は日下部太郎と改名し、長崎を出港した。彼の留学先は、フルベキの指導に従い、改革教会系統に属すラトガーズ学園であった。その年の七月（西暦）彼はニュージャージィ州ニューブランジック市に到着、ラトガーズ・グラマ・スクールに入学した。アメリカの学校は九月から新学年が始まるから、それにまに合うように渡航の日程が立てられていたのである。

グラマ・スクールにおいて日下部の成績が非常に優れていたので、彼は翌年ラトガーズ・カレジの三年生に編入された。アメリカのカレジでは卒業予定の年をもってクラスの呼称としていたから、彼は一八七〇年組に加えられた。

そのころラトガーズ学園では一八六四年に、従来の神学と古典学のカレジのほかに「ラトガーズ科学学校」が新設されている。日下部はこの科学学校に編入されたものと思われる。

ところが不幸なことには、彼は一八七〇年四月十三日（明治三年）卒業を目の前にひかえて二十五歳で病没した。学校当局は日下部の成績が優秀であり、しかも卒業直前の死亡であるので、彼に卒業の資格を授けた。

アメリカ合衆国には、優秀な成績で大学を卒業した人たちで全国的に組織している

ΦBK協会という団体がある。この有名な協会は故人である日下部の入会を認め、会員のシンボルである金のかぎを彼に与えた。ΦBKは、ギリシア語で「哲学は人生の導き」という句の頭文字を取ったものである。この種の協会はアメリカにいくつもあるが、歴史がもっとも古く、権威が高いのがこのΦBKである。

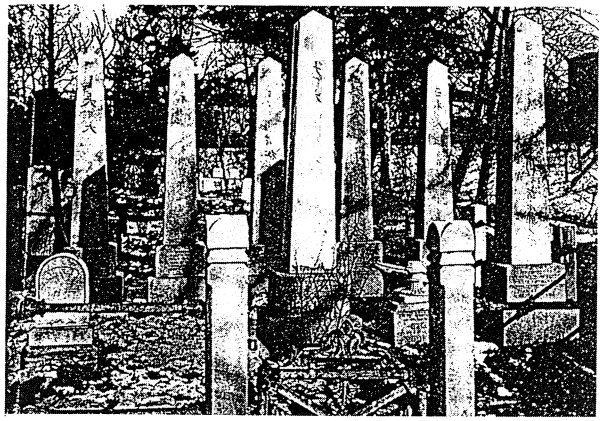
日下部の大望と死

日下部太郎は、卒業直前に肺結核で死亡している。結果的には、彼の留学は実を結ばず、不幸な結末に終わった。だがその原因はどこにあったのであろうか。

結核は伝染病ではあるが、チブスやコレラとは異なり、発病したらすぐ死ぬという急性のものではない。初期症状のとき早めに医者の診察を受け、療養をしておれば死ななくてもすんだであろう。また病状によっては学業を中絶し、日本へ帰って静養すれば回復していたかもしれない。

だが日下部は、重症になって倒れるまで療養しなかった。また死期が近付くまで日本へ帰ろうとしなかった。その理由は何であったのか。それについて述べるに先立ち、一つの事実を指摘しておく。

日下部太郎の墓は、ニューブランジック市の町はずれにある。第2図に示すようにその墓地には同じような墓が、日下部のものをも含めて七基ある。この七つの墓に葬られている七人の人物の氏名・出身地・死亡地・死亡年月日・死亡年齢は、墓碑銘によってわかっている。いずれも二十歳代の青年である。（ほかに日本人の幼児の小さい墓がある）



第　2　図

七人の死亡地は必ずしもニューブランジック市ではないが、七人ともおそらくラトガーズ学園の留学生であったろう。この墓地は、日下部が死んだとき日本の公使館が買い上げた土地であるから、他の州へ赴いてそこで死亡した留学生もここへ運んで埋葬したのである。

ラトガーズ・カレジの記録によれば、一八六六年から一八七六年までの一〇年間に日本から来た留学生は約四〇人であった。そのうちカレジに入学したのは一三人、卒業したのは四人である。その他の者はグラマ・スクールで勉強していたのであろう。

この約四〇人の留学生のうち七人が、学業半ばにして異郷の土になったものと推測すれば、これはもはや日下部太郎一個人の問題ではなく、幕末から明治初年にかけて外国へ送られた初期の留学生全般にかかわる問題であ

る。地元の福井の人は、日下部太郎の死だけを強調して取り上げているが、それはやや視野が狭いといわねばならない。

第 3 図

ついでながら第3図を見ていただきたい。ラトガーズ学園に留学していた一〇人の日本人学生の写真である。一八七〇年四月十九日写とある。日下部はこの年の四月十三日に死亡しているから、その六日後の撮影である。この一〇人が学友として日下部の葬儀の世話をしたのであろう。

さて本題にもどって、日下部太郎の留学が不幸な結末に終わった原因はどこにあるのであろうか。それには考慮すべき三つの問題点がある。

第一は学費の問題である。学費が少なければ、食事はろくなものを食べず、冬寒くても暖房もたかない。病気になっても病院へ行けない。こういうことが病勢を重くしていく原因となろう。

第二の問題点は、留学生の周囲の人、すなわち友人・先輩・先生たちが、留学生の相談相手になり、適当な助言指導をしてくれる状況にあったかということである。

第三の問題点は、留学生本人の心情のことである。故郷を出るとき、郷土の人たちから大きな期待をかけられ、本人も自分の抱負をやや大げさに宣言して来ていると、まじめな学生であればあるほど、過度の勉強をし、病気になっても学校を休まない。まして学業を中途で放棄して国へ帰ることは、したくてもできない。

〔第一の問題点〕　まず学費の問題から考えよう。幕末当時アメリカ留学には、生活費をも含めてどれくらいの学費が必要であったろうか。

勝海舟の子息勝小鹿が、日下部太郎と同じ時期にラトガーズ・カレジに留学していた。（前掲の写真に勝小鹿も写っている。後ろの列の向かって右から二番目である。）この小鹿の記録によると、生活費を含めた学費は年七一四ドルであった。この七一四ドルを当時の貨幣価値（一ドルが銀三分）で両に換算すれば五三六両になる。

ところが福井藩が日下部太郎に支給した学費は、最初は年一〇〇両であった。これではとうてい生活できない。彼は窮状を国元へ訴えたのであろう。心配した父親は、家財を処分して一〇〇両の金を日下部に送った。

日下部が学費の増額を藩に嘆願したので、藩も二年目からは二五〇両を支給することにした。多少楽になったであろうが、それだけではとうてい足りない。

三年目には、横井小楠が明治政府に交渉したおかげで、彼の二人のおいと日下部太郎、

それに薩摩藩の学生が、政府派遣の留学生という地位を政府から与えられ、年六〇〇元の洋銀を支給されるようになった。

洋銀というのは、通常はメキシコ・ドルのことであるが、この場合アメリカに送金するのであるから、アメリカ・ドルであったと仮定して両に換算すれば、四五〇両ほどになる。だいぶんよくなったが、まだ十分とはいえない。

しかし日下部の場合、彼の死後二〇〇冊余りの本が残っていたというから、彼は学費のかなりの部分を図書購入に当てていて、その分だけ生活費を切りつめていたのであろう。

〔第二の問題点〕　次に日下部の周囲にいた友人・教師のことを見てみよう。当時の日本人留学生は、ニューブランジックの町で必ずしも歓迎されていなかったようである。

グリフィスが書いているところによると、下宿屋の主人たちは、日本人を下宿させることによってアメリカ人の下宿者が出ていくことを恐れていた。ある下宿屋の女中は、この土地の方言で「日本人と同じ屋根の下にいると、他の下宿人が逃げ出す」といっていた。こんなに侮辱されているにもかかわらず、日本人の留学生がたくさんやってきたと、グリフィスは述べている。

このような状況下では、留学生たちが町の一般の人から親切にしてもらったり助言してもらったりすることは、少なかったのではなかろうか。まして病気ともなれば、天涯孤独の感を味わっていたのであろう。これに対し学友や先生はどのような助言指導をしていたであろうか。

明治初期に福井で『撮要新聞』という名の新聞が発行されていた。ただし今日のような日刊紙ではなく、月に二回発行の半月刊新聞であった。その第一〇号は明治六年（一八七三）一月に発行されているが、この一〇号には付録として『学校新聞』というのがついていて、それに日下部太郎に関する記事が掲載されている。

記事の執筆者は中野外志男という福井出身の青年である。当時グリフィスは、東京大学の前身である開成学校の教師として東京に在任していた。中野はそのグリフィスの家に寄宿し、学校ではグリフィスの実験の助手を勤めていた。そういう状況であったので、中野が新聞社から依頼を受けて、日下部太郎のことをグリフィスから聞き出して書いたのである。

その記事によれば、日下部は猛烈な勉強家であった。あまり勉強ばかりしているので、日本人の学友が少し散歩でもするようにすすめたが、仕事がたくさんあるからといって応じなかった。新聞の表現を借りるならば、「修業猛劇ノ勢ニ乗ジ、終ニ吾宝体ヲ忘トタリ」とある。つまり猛勉強のあまり自分の体の健康のことを忘れたというのである。

そのころのカレジには現在のようなカウンセラーの制度がなかったであろうから、カレジの教授たちは、日下部が過度の勉強により健康を損ねていることには、なかなか気がつかなかったようである。

病状が相当重くなってから、ある教師がそれに気づき、日下部が持っていた数百冊の本を隠して勉強できないようにし、医者の診察を受けさせ、田舎へ転地療養を命じた。このある教師とはグリフィスのことではないであろう。グリフィスは、カレジでは日下部より

一年上級生であったにすぎず、教師というよりは先輩である。それに彼はグラマ・スクールの先生であって、カレジの教授ではなかったから、学生を転地療養させるようなことはできなかったであろう。

転地療養をしたにもかかわらず、日下部の病状は悪化し、本人もついに日本へ帰る決心をした。旅券も手に入れ、あす出発という前夜、彼はあの世の人となった。死の病床にあったとき、だれか看護人が付き添っていたのか、臨終をだれか見守っていたのか、それらのことは不明である。

彼の葬儀の模様は改革教会系統の新聞にも報じられている。すこぶる丁重な葬儀であって、一学生の死をとむらうには少し丁重すぎるような感じである。葬儀に先立ち、日本人の留学生たちが会合して、葬儀はキリスト教の様式で埋葬の礼を行うことにきめている。

葬儀は四月十五日午後行われた。ラトガーズ・カレジの教授・学生、それにグラマ・スクールの学生が、行列を作って学校を出発し、日下部の遺体が置かれている下宿まで行進した。

その家で儀式があった後、棺を車に載せ、再び行列を組んで教会に向かった。棺を担って車に載せる役は、故人の親しい友八人である習慣なので、カレジの教授が同級生八人を選んでその役にあてた。八人は黒い喪服を着用、左の腕を白ちりめんで結んで、礼を行った。葬儀の列には教授・学生のほか、教授の令女や町の人も加わっていた。

教会での儀式は、改革教会の海外伝導部の責任者であるフェリス師(前述)がニューヨークから来て、葬式の総司会者になった。まずコーラスがあって、次にフェリス師が聖書の詩編九〇番の第二節を唱え、次に前任の日本派遣伝道師バルニイ(Ballney)が詩編九〇番のモーゼの祈りを読み上げ、さらにグラマ・スクールの校長マッケルウェイ(Mckelway)の祈とうがあって後、ラトガーズ・カレジの学長カンブル(Cambell)が弔辞を述べた。

学長の弔辞の要旨は、まず人の死と神とキリスト教の精神とについて述べ、「この宗教的精神のもとに、カレジと改革教会とはこの地に日本人を兄弟として迎えた」といい、日本人学生の中でも日下部太郎に対する期待が大きかったことを強調して、その死を惜しみ、カレジの学生に宗教的な教養を高める機会を増すようにすすめた。

続いて七五三番の賛美歌が歌われた後、大勢の人が遺体と別れの対面をすませると、野辺送りの行列が作られ、墓地に向かった。行列の順序は、まず聖職者、次にカレジの教職者、それから棺の付き添い人、そして霊きゅう車、次に死者の同郷人つまり日本人、続いてカレジの同級生、一般の学生、最後に知人たちである。棺の付き添い人には、ΦBK協会のニュージャージ州第一支部の全員があたっていた。遺体は墓地に埋められた。遺体を日本へ帰すことは、法律で禁じられている。

これだけ丁重な葬儀をしてもらえば、日下部太郎はもって冥すべきである。これはわたしの推測であるが、ニューヨークから改革教会の幹部が来て葬儀を司会しているところを見ると、日下部は改革教会に入信していたのではないかと思われる。しかし明治六年までは、日本ではキリスト教は邪宗門として禁止されていたから、日下部の入信を公然と発表することは、はばかられたのであろう。

ついでながらいえば、この葬式の経費について『撮要新聞』が他の新聞から転載している。その総額は七九九ドル二五セントであって、ほぼ一年分の学費に相当する。経費の負担は日本の弁務使（後の公使）およびアメリカにおける師友による。

支出の内訳は次のとおりである。

棺　二四四ドル五〇セント
教会費用　一〇ドル　花　八ドル
墓地買上　一二五ドル　同上登記　一ドル
石碑代・墓地の整地　一八〇ドル七五セント
墓地植木・芝　三〇ドル
葬式で世話になった下宿へ　一〇〇ドル
墓地石垣　二〇〇ドル

〔第三の問題点〕　日下部太郎は、なぜ病死するほど猛烈な勉強をしたのであろうか。その理由はほぼ推測できる。彼は大望をいだいてアメリカへ留学した。しかも彼は、その大望を他の人に公言している。

先に引用した『撮要新聞』の記事にも彼の志を「帰朝ノ日ニ臨ンデ、普ク学業技術ヲ教ヘ施シテ、我国民ヲシテ開化ノ域ニ歩ヲ進マシメン、トノ大望ナリシ」と記している。

彼はまた海外渡航に先立ち、父親に向かってアメリカ留学の目的を述べている。そのことばは吉田東篁筆の『堕涙碑』に漢文で記載してある。その内容はかなり気負い立ったものである。わが国の振るわざる理由を足利氏の失権より説き起こし、幕末期における内外の情勢を述べ、世界各国の開化と称するものは学芸技術である、その間大才英傑と称する者は幾人あるかと評し、自分が今から力を尽くしてかの学に従事すれば、なんぞ成らざることがあろうかと自負し、他日業を終えれば、他の国の大才英傑と称する者と広く万国の公法を論じ、天下の大義を断じ、彼我の間において是非曲直を審明して、皇国のために名義を正しくすると宣言している。まことに気宇壮大である。

日下部は福井出発に際し一編の詩を残している。

半肩行李雪郷身　好嚮西方独問津
蓬髪蛮衣請休笑　挽回皇国是何人

この第四句「皇国を挽回するのはなにびとぞ、それは自分である」と自負している。

彼のこれらのことばが、単なる大言壮語ならば、どうということもないのであるが、本心からの大望であるとき、その精神的負担はずいぶん重く、ついには身体的限度を過ぎた勉強をするということになる。少々の病状があっても、気力でがんばろうと無理が累積する。

日下部太郎も人の子である。重い病床にあって、故国の親元へ帰りたいと思ったであろう。しかしあれだけの大望を公言し、多くの人から期待をかけられて国を出た以上、簡単に学業を中止しては帰れなかった。結局死に至るまでがんばるよりほかはなかった。

現在福井市に日下部太郎の顕彰碑が建っている。しかし彼は、若くして死んだため、現実的には日本国に対しても、福井県に対しても具体的な貢献をなにもしていない。ただ、もし病死しなかったなら国家有為の人になったろうという期待で顕彰碑が建てられているのである。そしてそのような期待が、彼をして故郷へ帰りがたくし、死に至らしめたのであろう。

注

1　図と写真合わせて三枚は、次の書による。

The Rutgers Picture Book by Michel Moffatt 1985

墓地の写真が左右逆になっており、留学生の写真がページの継ぎ目で切れているが、両方とも原画のままである。

2　一八六五年前後のラトガーズ・カレジの事情は次の書による。

An American Teacher in Early Meiji Japan by Edward R. Beauchamp 1976

3　日下部太郎の経歴については次の書による。

『日下部太郎』永井環著　昭和五年

そのほか次の書も参照した。

『ハドソン川は静かに流れる』　松村正義著　昭和五〇年

「日下部太郎」　舟沢茂樹執筆　『若越山脈』第三集　昭和四十五年

4　日下部太郎の病死・葬列・葬儀費用は次の新聞による。

『撮要新聞』一〇号付録『学校新聞』　明治六年一月

日下部太郎の葬列・教会での葬式・教会から墓地への葬送は、グリフィス文庫所蔵の新聞切り抜きによる。新聞紙名および発行年月日は不詳であるが、改革教会系統の機関紙で、日下部の葬儀後まもないころの発行と思われる。